

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

● 第121回 ●

■ 三森さん追悼



前号に続き、またも追悼記事を書くのは本当に辛い。今回は、元理事長の三森九段である。三森さんとは私がドイツから戻ってからよく話をするようになった（と言っても理事会でだ）。三森さんは常に連珠界の行く末を心配されていた。毎年の年賀状には連珠界にかかわっていたとき感謝するという意味のことが書か

れていた。また、寄付も毎年のようにしていただき、財政面でも支えていただいた。

ところが、数年前にご息を亡くされ、そこから一気にふさぎ込んでしまったようだ。ここ2年ぐらいは全く連絡が取れなかったのだが、2か月ほど前に電話を掛けたところ、お元気な声だったのでまさかこのタイミングで亡くなれるとは思っていなかった。まさに青天の霹靂という感じであった。

三森さんは昭和11年8月生まれ、実は私の母親と同じ年である。昭和2桁世代もこれからは注意しないといけない。

さて、三森さんと言えはいろいろな印象があるが、まとめてみた。

●その1 ちゃきちゃきの江戸っ子

三森さんの印象として、一番先に来るのがこれだろ

う。べらんめえ口調がトレードマークと言ってよい。

●その2 黒番が大好き

黒番が好きなのはいろいろおられるが、三森さんも典型的な黒番好き人間であった。三森さんはその昔十九道の連珠も打っていたので、黒番でどんどん引いていく打ち方がベースにある。ある時、「最近はおんと呼手を打ってくるから困る」と嘆いていたが、なかなか十五道連珠に対応できなかった。ただ、あの中村名人も恐れた黒の猛攻は切れ味鋭かった。

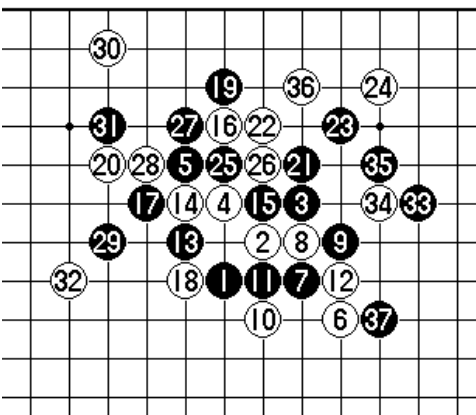
●その3 白の時は定石を指定する

三森さんが白番の時の対処も面白い。定石をよく指定された。題数指定打ちになる前から峡月・溪月の定石を指定していた。私もその畏にはまったこともあった。A級リーグでも苦杯を喫した。

また、三森さんと言えは、

第1期の名人戦挑戦手合いを争ったことでも有名である。山北さんとの挑戦手合いは2分2敗で敗れたが、以後毎年のようにA級に出場されていたのはさすがだ。今回は、その第1期名人戦挑戦手合いを振り返ってみよう。

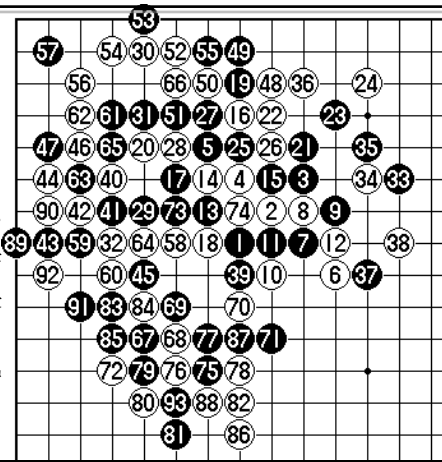
◆ 第1局
黒 山北 白 三森
(1～37まで)



当時は1、2局目は常に長星だった。「長星を制する者が珠界を制す」とは昔言

の結果がそのまま名人戦の結果になっていくことが多い。白6は三森さんの趣向で、以下黒13では現在では喜んで37に止めておく所だろう。白は着実に止めたのだが、白14では18に打っておけば、同様に黒15なら今度は下辺で白勝ちが出る。黒37までで一段落、ここからは白が勝てるかどうかだ。

(1~93)

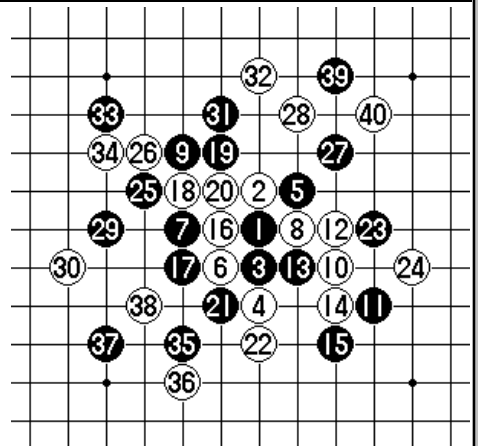


ところが、結果を見ると何と黒勝ちしている。これはどういうことかと言うと、白88で黒を三々禁に嵌め

たつもりが、黒89から大逆転の四追いが炸裂したのである。今回初めてちゃんと並べて、こんなドラマがあったのだとびっくりした次第である。黒の剣先が見えなかつたのだろうが、三森さんはまだ時間が残っていたので、ちゃんと確認すれば負けることはなかつた。本当に惜しいことをした。挑戦手合いでもこんなことはあるのである。

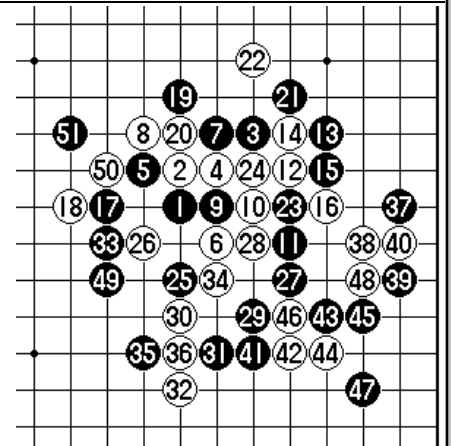
この敗戦が響き、名人位を取る事ができなかった。続く第2局は長星で黒負けを喫し、早くも土俵際に追い込まれた。第3局も見てみよう。長星裏表の後は松月となった。難珠型と言うことで第3局以降は松月、斜月、瑞星、疎星あたりが多く打たれている。長星の後からが本当の勝負ということも多い。

◆第3局 黒 三森 白 山北
松月黒9からの打ち方は、



今でもよく打たれる形である。黒19と止めるのも一周回って見直されている。黒31の四ノビが三森さんらしい。こういう所は単に33に打つところだが、何か嫌な理由があつたのだろう。この局は黒が攻めていたのだが、攻めきれず満局となつた。

◆第4局 黒 山北 白 三森
最終局は疎星となった。山北さんとしては満局で十



分なので、気楽に打てる。白は勝たないといけないので、もう少し欲張って打つても良かっただろう。三森さんとしてはやはり第1局の見落としが痛かつた。三森さんから直接挑戦手合いの話聞いたことはないが、聞いていたらまたべらんめえ口調で愚痴を言ってくるのだろう。

三森さんにはまだまだ普及の面でご活躍してほしかったし、理事を退いてからもう相談役として残ってほしかった。もう姿を拝見できないのは本当に残念である。